

ユリ類の活用及び苗物との混植による

夏花壇の観賞性向上技術

施設園芸先端技術担当 石川貴之

1 背景・目的

- 夏の花壇は植物にとって過酷な生育条件下にあり、利用される品目も限られている状況です。一方、夏に開催されるイベントに対応すべく、新たな手法で夏を彩る花壇への社会的需要が高まっています。
- ユリ類は品種が豊富で、主要な品種群の LA 系ユリはテッポウユリとスカシユリの交雑種で、オリエンタル系ユリはヤマユリやカノコユリなど、極東に自生する種をもとに育成されました。
- そこで、埼玉県的主要な切り花品目である LA 系ユリとオリエンタル系ユリを活用し、花壇苗との混植により管理労力を抑え、開花期の異なるユリ品種を組み合わせることで、継続的に咲かせる夏花壇の観賞性向上技術について検討しました。

2 試験方法および結果

(1) LA 系ユリとオリエンタル系ユリの開花特性

- LA 系ユリとオリエンタル系ユリの球根を、6月上旬に鉢に植え、夏季の開花特性を調べました。(定植後の発根を促すため、球根は15℃で2週間冷蔵しました。)

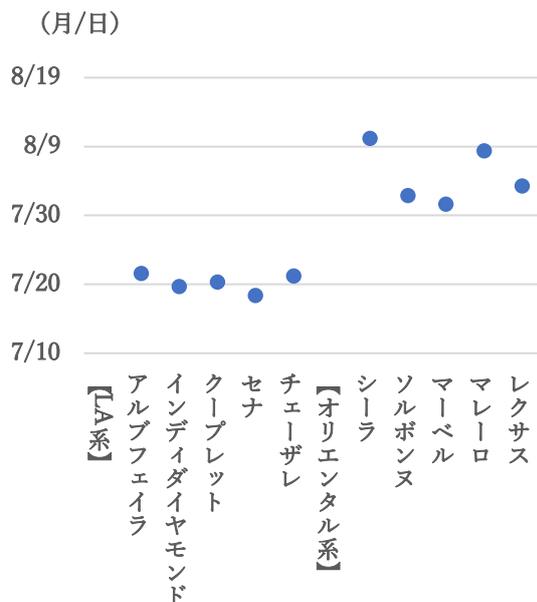


図1 ユリの開花日

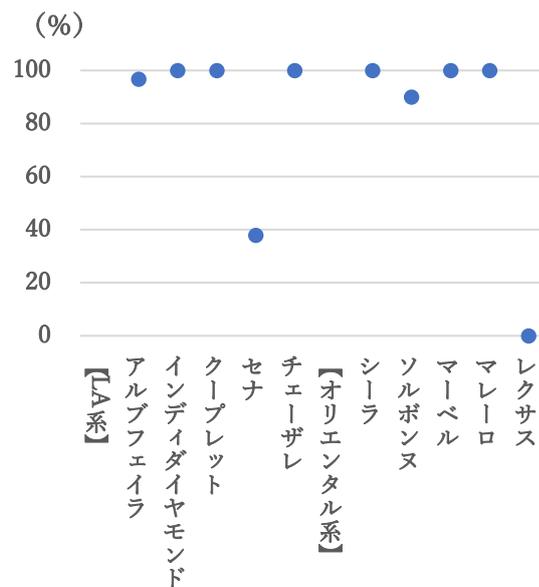


図2 ユリが正常に開花した割合

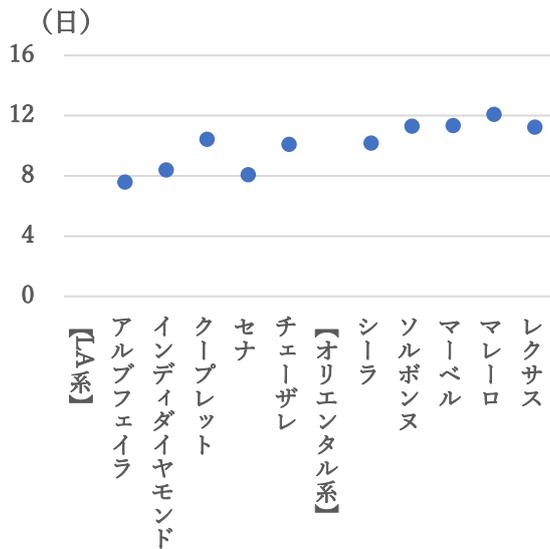


図3 ユリの花の平均開花期間

(正常に開花しない花も含め、1本当たりの第1花から最終花がしおれるまで)

- LA系ユリよりもオリエンタル系ユリは開花が遅く、開花日の品種間差が大きくなりました (図1)。
- ほとんどの品種が気温の高い時期でも正常に開花したことから、ユリ類は夏の花壇に利用できることがわかりました (図2)。
- 1本あたり10日ほどの開花期間のため、花壇に植栽した場合、花の観賞期間を延長する技術が求められます (図3)。

(2) LA系ユリとオリエンタル系ユリを用いた花壇の観賞期間延長

- LA系及びオリエンタル系の3品種を組み合わせ、6月上旬に20cm間隔で花壇に植え付け、開花期間を調べました (図4)。

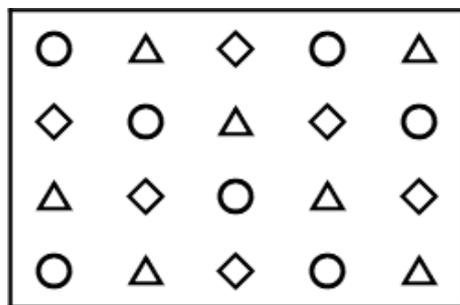


図4 植栽方法 ○：品種1、△：品種2、◇：品種3

(同品種が隣り合わずに、3品種が均等に散らばるよう植栽)

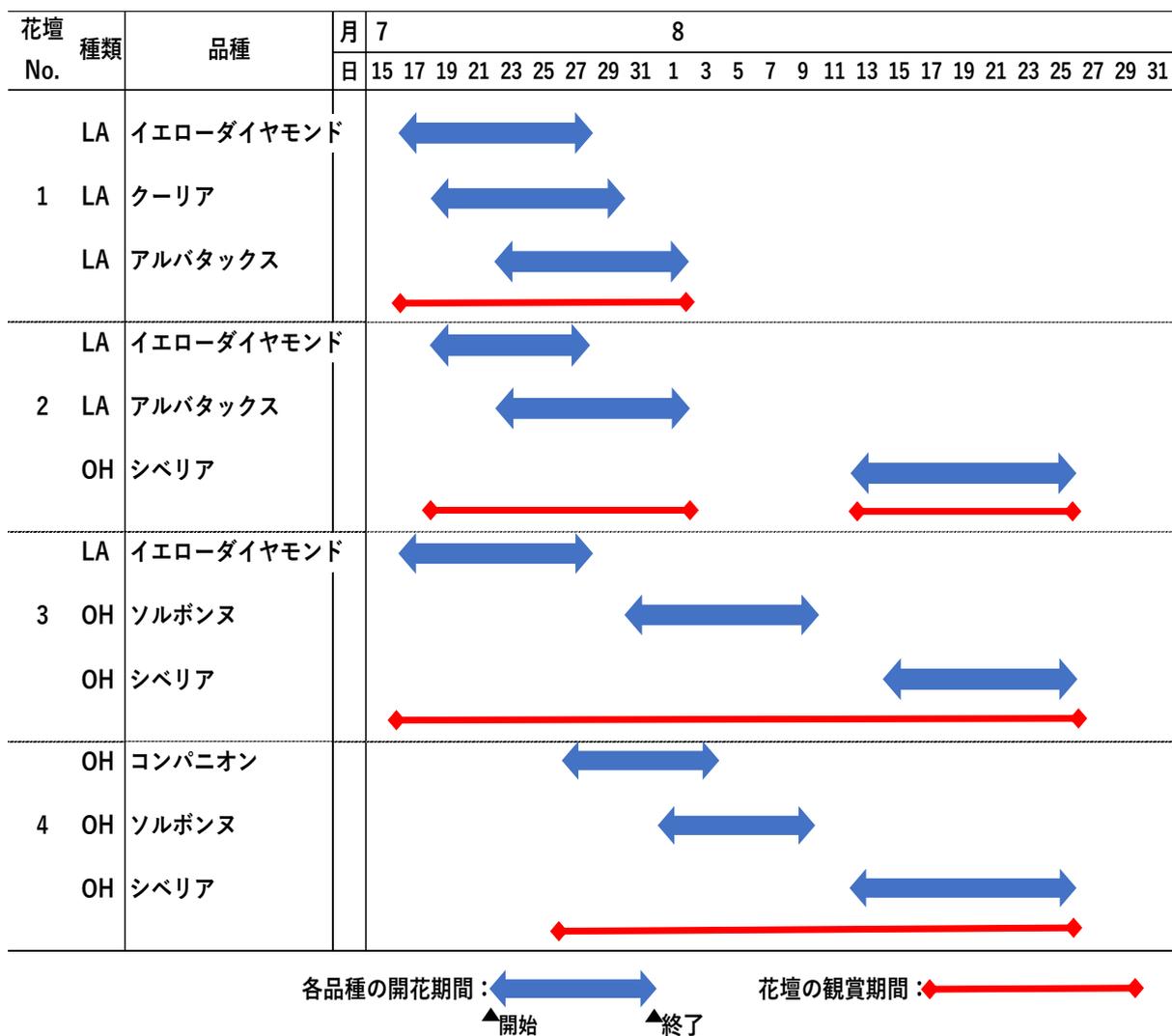


図5 花壇におけるLA系ユリ (LA) とオリエンタル系ユリ (OH) の開花期間

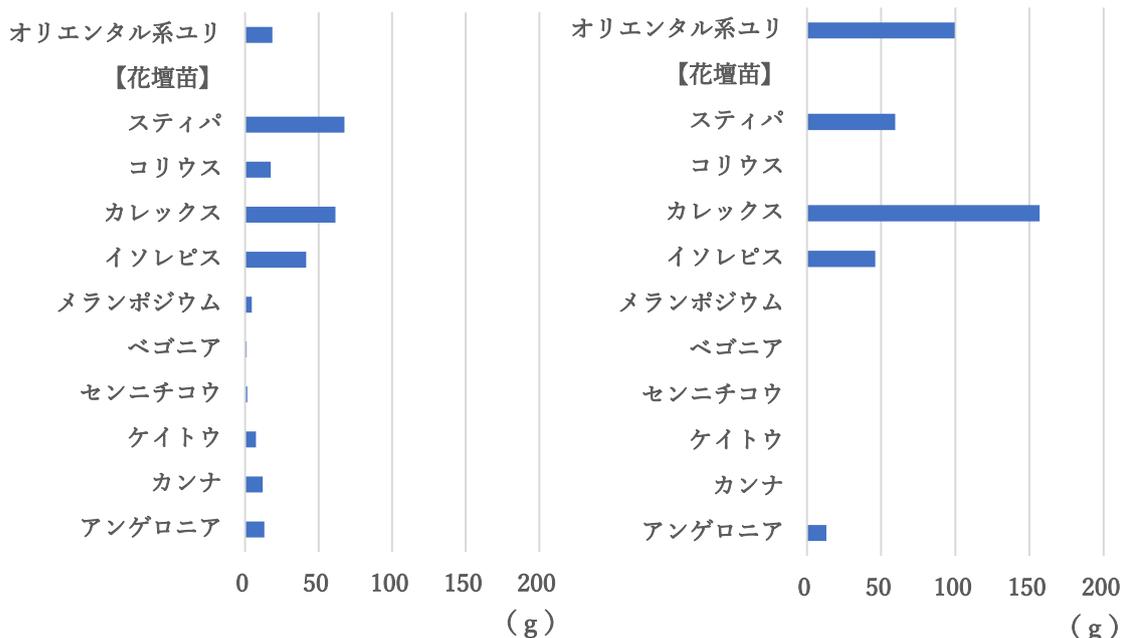
○ LA系ユリ3品種からなる花壇 (No. 1) は、ほぼ同時期に開花したため観賞期間は17日間であるのに対し、LA系ユリ1品種とオリエンタル系ユリ2品種からなる花壇 (No. 3) は、3品種が順次開花したため観賞期間が33日間になりました (図5)。

○ LA系ユリにオリエンタル系ユリを組み合わせて6月上旬に混植することで、7月中旬から8月下旬の1か月以上に渡り花壇を彩ることができました。

(3) 花壇苗の品目の違いによる除草量の差異

○ オリエンタル系ユリ及び花壇苗を、6月上旬に各々25cm間隔で花壇に植え付けました。

○ 7月下旬と9月上旬に除草を行い、品目ごとに5個体 (125cm×25cm) について除草量を調べました。



(除草作業日：7月下旬)

(除草作業日：9月上旬)

図6 品目別の除草量

- 品目により除草量は大きく異なり、生育が旺盛で地面を早期に被覆する品目（メランポジウム、ベゴニア、センニチコウ等）は雑草繁茂を抑制することが分かりました（図6）。
- ユリは地面の被覆率が低く雑草が繁茂するため、地面を被覆する花壇苗との混植により雑草の生育を抑制できると考えられました。

(4) 花壇苗とユリの混植による除草の省力化と花壇の観賞性向上

- 高性の花壇苗（メランポジウム、ベゴニア、センニチコウ等）との混植では、ユリの花の高さまで苗が伸長すると、ユリの花が見えづらくなります。
- そこで、根域制限による苗の伸長抑制を目的に、紙ポットごと植え付ける方法を試み、7月上旬に25 cm間隔でLA系ユリと交互に花壇へ混植しました。
- LA系ユリの開花開始日に、花壇苗の草丈（地際から草姿の最上部まで）とLA系ユリの茎長（地際から花序の下部まで）を測定しました。

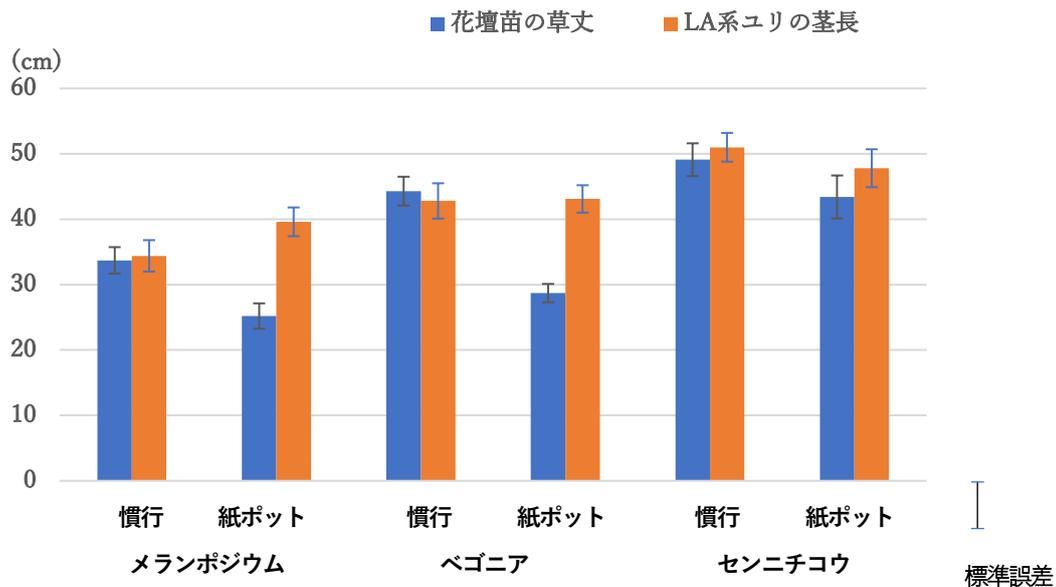


図7 根域制限処理を行った花壇苗の草丈とユリの茎長の比較

- 慣行と比べ紙ポットごと植えることにより、LA系ユリの開花時には、ユリの茎長以下に草丈を抑えることができました（図7）。

3 今後に向けて

- 新たな品目を用地夏に花壇を彩ることが定着すれば、花壇苗の需要創出が期待できます。
- 夏花壇の魅力を向上させるため、引き続き花壇の観賞性を高め、管理労力を低減させる技術開発を行っていきます。